

モニタリングサイト1000



モニタリングサイト1000

シギ・チドリ類調査 ニュースレター

環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

2018年春季概要

2018年春季結果の概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2018年度春季の概要をお知らせします。



最大個体数は2000年以降最低値

2018年度春季調査は、2018年4月1日から2018年5月31日までの期間実施されました。116ヶ所の調査サイトで調査が実施され、このうち一斉調査（2018年4月22日を基準日とした前後1週間の調査）への参加は103ヶ所でした。一斉調査期間では、シギ・チドリ類 44種29,111羽、ツクシガモ317羽、ヘラサギ5羽、クロツラヘラサギ183羽、ズグロカモメ26羽が記録され、冬期の全サイトの最大個体数（調査期間内に記録された各種個体数の最大値）の合計では、シギ・チドリ類 53種69,220羽、ツクシガモ851羽、ヘラサギ17羽、クロツラヘラサギ298羽、ズグロカモメ316羽が記録されました。

2000年春季以降の「全サイト」と「調査が継続されているサイトのみ」の最大個体数の合計を、ヒレアシシ

ギ類を除いてグラフに示しました（Fig.1）。全サイトの最大個体数の合計は、前年度春季と比べ8,227羽（-10.8%）減少し67,819羽、継続サイトでは前年度春季と比べ3,137羽（-7.5%）減少して38,886羽となりました。全サイト、継続サイトとともに2000年以降最低の個体数を記録し、2014年からの減少傾向が続いています。

個体数では、ハマシギ（-3,910羽）、キアシシギ（-1,598羽）、トウネン（-710羽）の減少数が大きく、100個体以上観察された種の減少率では、ウズラシギ（-44.3%）、シロチドリ（-44.1%）、ホウロクシギ（-36.9%）の減少率が高くなっていました。前年に比べ34種が減少しており、特にキアシシギは減少数、減少率ともに高い水準にあります（Photo1, Table1）。



Photo1. キアシシギ
by Toshifumi Moriya

Table1. 春季調査における種別の減少数と変化率 A: 減少数上位種、B: 減少率上位種

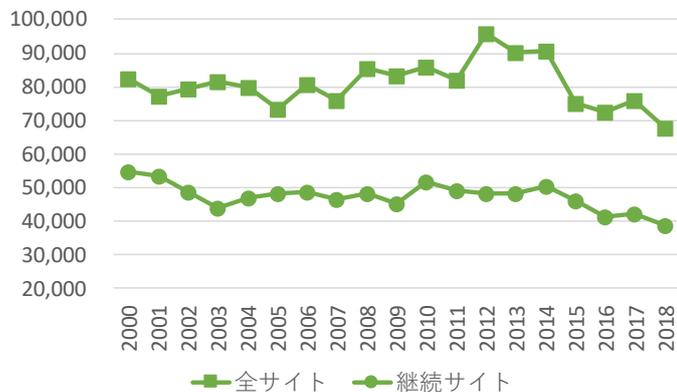


Fig1. 春季調査における全サイトと継続調査しているサイトの最大個体数合計の推移（1999年から2017年の継続サイトN=42）年次変動の大きいヒレアシシギ類は除外

		2017年	2018年	減少数	変化率
				Change No.	Change rate
A	ハマシギ	33552	29642	-3910	-11.7%
	<i>Calidris alpina</i>				
	キアシシギ	5003	3405	-1598	-31.9%
	<i>Heteroscelus brevipes</i>				
	トウネン	8299	7589	-710	-8.6%
	<i>Calidris ruficollis</i>				
	ムナグロ	2965	2282	-683	-23.0%
	<i>Pluvialis fulva</i>				
	チュウシャクシギ	7347	6727	-620	-8.4%
	<i>Numenius phaeopus</i>				

		2017年	2018年	減少数	変化率
				Change No.	Change rate
B	ウズラシギ	316	176	-140	-44.3%
	<i>Calidris acuminata</i>				
	シロチドリ	945	528	-417	-44.1%
	<i>Charadrius alexandrinus</i>				
	ホウロクシギ	287	181	-106	-36.9%
	<i>Numenius madagascariensis</i>				
	ケリ	381	251	-130	-34.1%
	<i>Vanellus cinereus</i>				
	キアシシギ	5003	3405	-1598	-31.9%
	<i>Heteroscelus brevipes</i>				

地域別の最大個体数では、有明海・不知火海、東京湾周辺、瀬戸内海西部・周防灘、伊勢湾の順に多く確認されており、この傾向は近年変化がありません（Fig2）。前年度春期と比較すると北海道西部、東北日本海側、関東内陸湿地、北陸沿岸部、伊勢湾、瀬戸内海西部と周防灘、四国太平洋岸、博多湾周辺、有明海と不知火海、沖縄本島、宮古・八重山地域が減少しており、西日本で減少している地域が多い傾向があります。東北日本海岸（-72.2%）、関東内陸湿地（-37.7%）、沖縄本島（-41.8%）、宮古・八重山（-51.4%）地域では、特に減少率が高い傾向がありました。2018年度春期は例年に比べて暖かく、4月1日の調査が始まる前に移動を始めている種があった可能性があり、南西諸島で影響が大きく出ている可能性があります。

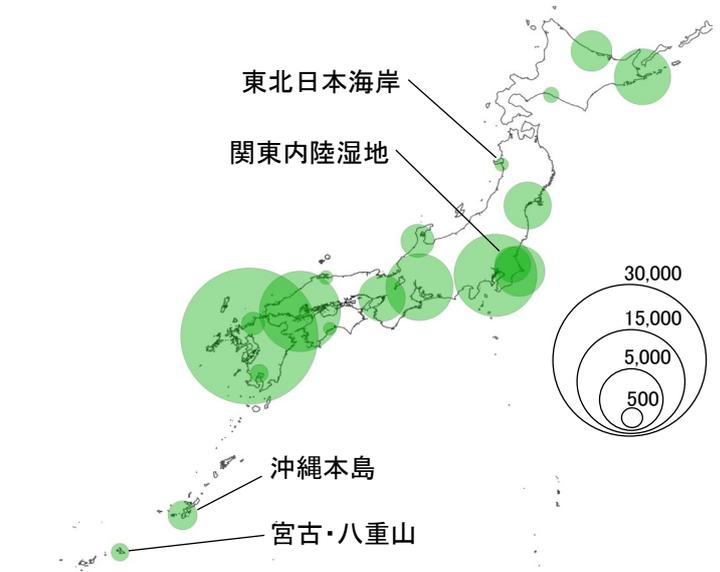


Fig2. 地域別のシギ・チドリ類の最大個体数分布

最大個体数における優占種の上位種は、ハマシギ（42.8%）、トウネン（11.0%）、チュウシャクシギ（9.7%）で、前年度順位から上位3位は変化がありませんでした。4位以降は前年4位のキアシシギ、5位のダイゼンが順位を1つ下げ、キョウジョシギが4位となっています（Fig.3）。

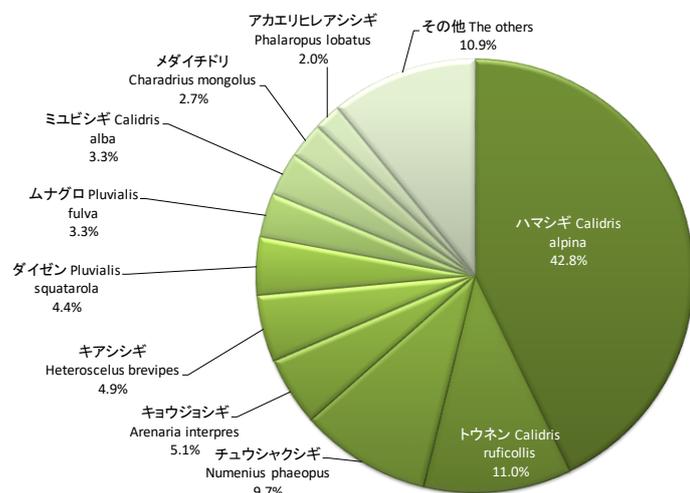


Fig3. 春期調査におけるシギ・チドリ類の種構成



キアシシギも最大の減少

2018年の春期のキアシシギが高い減少率を示していますが、2000年以降のキアシシギの最大個体数の動向では、2001年、2009年、2010年、2014年にも大きく減少していましたが、今回は最も大きい減少幅でした（Fig.4）。サイト別に詳しく見ると、八代海、伊勢湾、日本海側で100個体以上前年度より少ないサイトが確認されています。

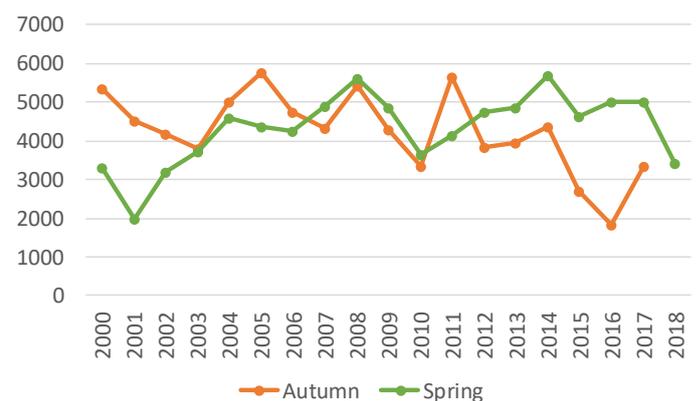


Fig4. 2000年から2018年までのキアシシギの最大個体数の動向

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター タイトル写真:コチドリ(守屋年史) 2018年 春期概要

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

<http://www.bird-research.jp/>

編集者 守屋年史

電話/Fax: 042-401-8661

メール: shigichi@bird-research.jp